会津の雲洞庵・直江兼続の寺　会津若松市大戸町大豆田

曹洞宗　瀧澤山東雲寺　慶長11年（1606）開山　本尊釈迦如来

越後雲洞庵

大戸町上三寄大豆田（まめた）の東雲寺

越後の上杉景勝（かげかつ）と直江兼続（かねつぐ）が幼少時代過ごした新潟県南魚沼市にある曹洞宗雲洞庵は、慶長三年（一五九八）景勝の会津移封に伴い会津に移転し建てられました。

雲洞庵は、越後一の寺院で、景勝の父長尾政景が死去すると、景勝の弟の十三世通天存達和尚は、景勝母の仙桃院から景勝と小姓の兼続を寺で預かり、中国の古典などを学ばせ、後の智将へと結びついたとされています。本堂には、上杉氏や兼続に関する文書とゆかりの品々が残されています。その仙桃院ゆかりの東昌寺も会津若松市川原町にあったのですが、戊辰・会津戦争で焼失し、再建されませんでした。

『新編会津風土記』の会津若松市高野町界沢村の記述に「東雲寺跡　界沢村北にあり　元禄四年（一六九一）」本郡（会津郡）南青木組大豆田村に移れり」と書かれています。寺は、兼続が総指揮して未完成となった神指城の北約三・五キロメートルの会津若松市高野町界沢に「雲洞庵」を「洞雲寺」と変え建てられました。寺は、神指城下の町割でいうと、北東部の町人街にあります。しかし、慶長六年（一六〇一）上杉氏が移封になると寺も米沢に移転しますが、会津に残った家臣によって若松城下北端の千軒道（会津若松市中央二丁目）に洞雲寺、大戸町上三寄大豆田に洞（東）雲寺として建てられたのです。

若松城下の洞（東）雲寺は、『新編会津風土記』に「東雲寺　曹洞宗なり始めは高久組界澤村にありと云」とありますが戊辰・会津戦争で焼失して再興されませんでした。

大豆田の洞雲寺は「東雲寺」で『新編会津風土記』に「東雲寺　曹洞宗龍澤山、なり始めは高久組界澤村にありて金屋尾張という者の開基なり、伊達氏の乱に焼亡し、天寧寺十一世監室再考し、慶長十一年（一六〇六）雲龍という僧住し、監室をもって開山とせしぞ。旧ここに鹽鳥山林泉寺という洞家の寺あり、寛文中廃寺となり元禄四年（一六九一）ここに寺を移せり」

上杉氏時代に兼続公配下として大沼郡の奉行をしていた山田喜右衛門の一族孫左衛門が建てたものです。『新編会津風土記』に向羽黒山城の搦手（からめて）となる三日町口を三百人を固めていたという。向羽黒山城は、会津の領主の山城で、最後の砦となる大規模な山城のため国史跡に指定され、春日山城とともに日本三大山城の一つです。上杉氏が会津を去っても山田氏は米沢には行かず大戸町上三寄で屋敷を構えました。平成十年、屋敷跡の「山田遺跡」は、ほ場整備に伴い会津若松市教育委員会によって発掘調査が実施され、建物跡が確認され、当時使用された十七世紀代の瀬戸・美濃窯の陶磁器が出土しました。山田家屋敷跡は、現在弁天池と呼ばれ、イトヨが棲む湧水地として親しまれています。

図・写真・文　©石田明夫2019　問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索